

Monthly

この街と生きていく。

毎月10日発行／昭和26年10月24日 第三種郵便物認可
平成23年11月10日発行／第65巻第11号 ISSN 1343-5280

Face to Face

11

2011
November

信用金庫

信用金庫法制定
60周年

特集 ネットワークを活かした観光による地域振興

シリーズ 信用金庫法制定60周年⑨ ● 中村利雄

私の経営理念・経営方針 ● 中川弘之(日生)

シリーズ 地域社会の持続的発展に向けて⑥⑩ ● 藤村靖之

「人が動けるBCP」を導入 ● 川崎

東日本大震災復興支援における支援者の活動 ● 中村順子

記録 業界内の被災地支援活動 ● 刀禰和之

まちから、ちから。⑰ ● 齋藤喜以子

得意分野とノウハウを生かし、被災地の自立型復興をサポート!

- 福井善朗 ● 石川智康
- 埼玉縣 ● 東京東 ● 長浜 ● 愛媛





「子ども新聞」はメディアで取り上げられ、被災地の特産品ギフトにも同梱されて、被災地と全国各地をつなぐ一助に



ガソリンを使ってハイブリッドカーを走らせ、被災地に駆けつけた。5月には、業種・地域を超えて全国各地の個人に呼びかけ、「子どもたちが夢を見られる日本にしよう!」を合言葉に、「チームともだち」プロジェクトを設立。参加メンバー個々の得意分野やノウハウを生かし、相互に連携して被災地が自立的に復興するためのサポートをめざす。

最初の活動は、岩手県九戸郡野田村で5月7日に開催された「野田村さくらまつり」。これまで村独自のお祭りはなかったが、とにかく元気になってもらいたいとの一心から、小学校を会場に、和太鼓&篠笛の演奏、ゲートボール大会、お絵かきコーナー、フリーバザー、屋台など、盛りだくさんのイベントを行った。当初は避難所の片隅で「お祭りに参加しませんか?」の紙を持って立ちつくす日々



ブランドワカメの加工場で働いていた女性たちと、オーガニックコットンメーカーとの連携による「東北グランマのクリスマスオーナメント」プロジェクト



壊滅的な被害に負けず、強い意志で復興をめざす大指の若手漁師

が続いたが、ようやく1人がおそろのおそろ参加を表明すると、堰を切ったように私も私もと手が挙がり、当日は大にぎわい。これが被災地の人たちと直接つながるきっかけとなり、その後のさまざまな活動へと発展する。

元気創出と、雇用に結びつく活動

野田村の子どもたちと、群馬県桐生市の小学校の子どもたちとの連携で実現した「子ども新聞」もその一つ。野田村の子どもたちが取材して集めた情報を、桐生市の小学生が編集して発行する。6月には被災地の名産品を支援するネットショップを立ち上げ、5000円の支援金付きギフト商品を提供したところ、お中元用に使用したいと多くの購入申し込みがあった。

被災地の雇用につなげる活動としては、機



お中元シーズンに800セットを販売した被災地特産品セット



かつては水着をつくっていたという縫製工場。修理したミシンで雇用を復活し、技術力を生かす新材にチャレンジ

械が破損したため社員を解雇し工場を休止せざるを得なかった縫製工場が部分復旧後、モノづくり技術を生かす新たな商材開拓に努めている。さらに、4世帯同居で若者比率が高い宮城県石巻市の^{おおさし}大指地区では、漁業が壊滅状態となったにもかかわらず、漁業復興に向けた強い意欲に感銘。手始めに、大指の女性たちと東京のオーガニックコットンメーカーが連携するクリスマスオーナメントプロジェクトを推進している。そのほか、被災地に花を植えるプロジェクト、10月には東京銀座で被災地の声を直接伝えるセミナーを開催するなど、「チームともだち」の活動は止まらない。

代表理事の登内さんは、「社団法人として登記されたので、今後は、緩やかなネットワークを維持しつつ、さらに付加価値を創出できる事業を展開したい」と語る。



第43回

有田鉄道 藤並 (和歌山県有田川町)

駅のある風景

すべての駅は誰かの最寄り駅、ふるさとの駅、全国各地の「町の顔」を訪ねる小さな絵日記。

JR紀勢本線の藤並駅と接続していた有田鉄道ですが、2002年いっぱいをもって廃止されました。その後、線路は姿を消し、JR藤並駅も駅舎が建て替えられました。線路跡は遊歩道として生まれ変わり、途中の御霊(ごりょう)駅は駅舎が残され、当時の様子を伝えています。また、終点の金屋口駅一帯は、有田鉄道を再現したジオラマなどがある有田川鉄道交流館を核とした有田川鉄道公園として整備され、金屋口駅や車庫、レールの一部も残されて、同線で活躍した車両たちや当時の終着駅の風情に今も会いにいことができます。

絵と文 松本忠

鉄道風景画家。全国の「鉄道のある風景」をテーマに描く。各地で個展を開催。著書に「大人の塗り絵 ローカル線のある風景編」(河出書房新社)など。公式HP「もうひとつの時刻表」

編集後記



◆信用金庫のネットワークを活かした観光が広がりをみせている。受け入れる地域の自治体・観光協会などの協力を得て、普段は見るできない名所・旧跡を見ることができるので、参加者の満足度は増すだろう。旅館や土産物店なども信用金庫の取引先であれば、相互にメリットが生まれる。▼東日本大震災では、自治体・商店街なども関わりのある地域への支援を優先する傾向がみられた。姉妹都市、交流の歴史、特産品が同一などなどの地域へ、とにかく真っ先に駆けつけた。普段から、地域と地域が互いに関わることがBCPにもつながるのだ。

◆3・11以後、何か自分にできないか、個人の思いを発露して他とつなげる場づくりができないか—そんな思いから、緩いネットワークが私の住むまちで生まれた。年齢も20~60代と幅広い。都会の人付き合いではあり得なかったことだ。非電化工房・藤村代表に本号でご執筆いただいた「ローカル・クリエイティブ」をお手本に、「連関の好循環」を生み出したい。▼「まちから、ちから。」でご紹介したプロジェクトの一つ、「東北グランマのクリスマスオーナメント」を娘の学校のバザーで販売した。ひと針ひと針に込められた思いをネット(動画)で知り、関わらせていただけたことに感謝。このオーナメントの売り買いは、“物語”への参加だと思った。

次号の予告

- 〈シリーズ〉信用金庫法制定60周年(最終回)
…神奈川大学 名誉教授 松岡紀雄氏

特集 健全な消費者信用の実現に向けて 市民が市民を救う社会へ

- …一般社団法人生活サポート基金 常勤理事 横沢善夫氏
〔事例〕一関信用金庫/多摩信用金庫/尾西信用金庫/
遠賀信用金庫/南郷信用金庫/信金ギャランティ

- 〈シリーズ〉地域社会の持続的発展に向けて(61)
…一般財団法人ジャスト・ギビング・ジャパン
業務執行理事 佐藤大吾氏

- 「2011年の金融界を回顧する」
…日本経済新聞社 編集委員・論説委員 小平龍四郎氏

- 当金庫の若手渉外担当者への同行指導について
…西尾信用金庫

- 「地域活性化しんきん運動」推進事例
…秋田信用金庫

- ◆私の経営理念・経営方針
…渡島信用金庫

- ◆わが支店長時代
…福島信用金庫

- ◆われら信用金庫人
…しんきんキャリアサービス
ほか

*内容等が一部変更となる場合もございます。

まちから、ちから。 17

くらし・まちづくりコーディネーター
ジャーナリスト 齋藤 喜以子

被災地支援のベースがあった

「下請の底力」の取り組みのなかに、鳥獣害対策と農業機械を中心とするメンテナンス事業がある。どちらも好調で、北関東エリアを越えて全国各地から引き合いがあった。た

直後より、これまで取引のなかった会社から、

得意分野とノウハウを生かし、被災地の自立型復興をサポート！



得意分野とノウハウを持って集まった「チームともだち」のメンバー



グランマたちの温もりが伝わる手縫いのクリスマスオーナメント

非営利型一般社団法人チームともだち

(埼玉県吉川市)



熱い思いとエネルギッシュな行動力で周囲を巻き込む「チームともだち」代表理事の登内義也さん

本誌の2010年3月号で紹介した「株下請の底力」。長引く不況からの脱出を図るため、北関東で中小企業を営む若手経営者が連携し、新たな活路を見出そうと模索する様子を取り上げた。彼らは手探り状態で活動を続けていたが、そのさなかに東日本大震災が発生。持ち前のパワフルな行動力と斬新な発想で、ネットワークを進化させ、独自の被災地支援を行っている。その取り組みが、9月に「非営利型一般社団法人チームともだち」として登記され、活動は一層加速しそうな気配である。

だ、鳥獣害対策は、開発した忌避剤や檻かり、世にある電気柵さくなどの鳥獣害対策商品だけでは解決できず、ゴミの始末や出し方など地域コミュニティとの連携なしには奏功しない。

「チームともだち」プロジェクト始動

震災後、直ちに水平器とジャッキを持って、工場のフォークリフト用にストックしていた

防災関係（機械加工部品等）の見積もりがほしいとの問い合わせが殺到した。もともと北関東の中小企業は大手企業の一次下請であり、孫請会社は東北地域に散在する。今回、その孫請会社が被災したため、北関東の一次下請に仕事を戻そうという動きからだった。

というわけで、「下請の底力」には、①地域コミュニティとの連携、②機械のメンテナンス、③東北とのかかわりーなど、被災地支援のベースがすでに内在していたのである。